ブラジャーは自己呈示手段になり得るか
—下着の着用が自己に与える影響—

芝原　百華†　　坂本　晶子††　　阪田 真己子†
†　同志社大学文化情報学部　　††　（株）ワコール人間科学研究所

1. はじめに

他者が自分に対して抱くイメージを操作することを自己呈示という（小島・太田・菅原，2003）．短時間で他者への印象操作が可能である自己呈示手段として衣服があるが，衣服の中でも他者の視線に触れることが限定的である下着が自己呈示手段としての機能を有しているかどうかについてはこれまで確かめられていない．そこで本研究では，自身の理想像に近い，あるいは遠いブラジャーを着用することによって，着用者の意識，生理，行動にいかなる影響を与えるかを確かめるとともに，ブラジャーが自己呈示手段になり得るか否かについて検討することを目的とする．

2. 方法

実験参加者は，若年層（20 代）21 名と中高年層（40～50 代）20 名の女性であった．アンケートによって自己呈示の目標状態を明確にしたうえで，自身の理想像に最も近づけると思うブラジャーと最も遠ざかると思うブラジャーを1枚ずつ選定させ，印象評定を求めた．その後，理想像に近づけると思うブラジャーを着用する群（理想群）と，遠ざかると思うブラジャーを着用する群（非理想群）にランダムに配置し，ブラジャー着用前後に意識性評定，唾液採取，歩行課題を行った．

3. 結果

意識性評定の測定値をもとに因子分析を行った結果 3 因子が抽出され，それぞれ「活動性」「快不快」「ユーモラス性」と命名した．因子ごとの平均評定値の（ブラジャー着用）前後差分を従属変数に用い，独立変数を条件（理想群／非理想群）および世代（若年層／中高年層）とした参加者間計画による 2 要因分散分析を行った．

活動性因子については，条件にのみ主効果がみられ(F (1,39) = 15.167, p < .001, $\eta_p^2 = .291$)，世代の主効果及び交互作用は認められなかった．よって，世代に関わらず，理想群はブラジャー着用によって活動的な気分がより喚起されたことがわかった．

快不快因子については，年代(F (1,39) = 4.662, p = .037, $\eta_p^2 = .112$)，条件(F (1,39) = 9.840, p = .003, $\eta_p^2 = .210$)ともに主効果がみられた．さらに，年代と条件による交互作用もみられた(F (1,39) = 7.318, p = .010, $\eta_p^2 = .165$)．下位検定の結果，中高年層は条件に関わらず快不快感情の喚起に差はなく，若年層は非理想群において不快感情が喚起することがわかった（図1参照）．

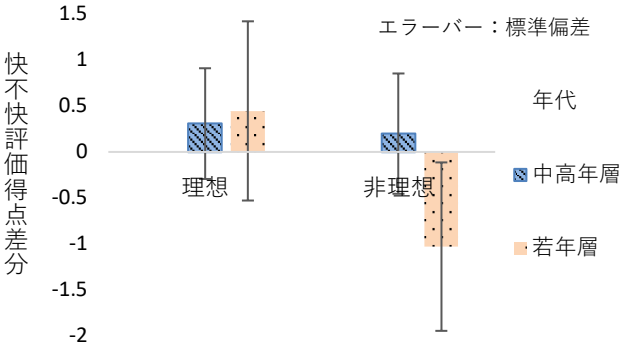

図1．ブラジャー着用前後の快不快感情の変化（差分）

4. 考察

自己呈示の目標状態の特性及び，それに基づくブラジャー選択の特性から，各世代が求める理想の姿が浮き彫りになったとともに，世代によって目標状態として目指す状態に異なりがあることが確かめられた．菅原（2016）は，加齢に伴って外見若さ志向から内面若さ志向にゆるやかにシフトすることを示しており，本研究においても，下着に対する志向性とその志向性に基づく対自的な影響が世代によって異なることがわかった．この結果は，見えない衣服であるはずのブラジャーが，自己呈示手段としての機能を持っているとともに，その機能のあり方が世代によって異なることを示唆するものと考えられる．

ブラジャーが（生物学的あるいはジェンダーとしての）女性が着用する（他者からは）見えない衣服であることに鑑みると、女性にとっての「ブラジャー」の選択は、自身のジェンダー観を顕在化する機会ということもできる。本研究では世代による傾向が確認されたが、ブラジャーというフィルタを通して、世代内においても、個々人がもつジェンダー認知の特性が明らかにできると期待している。

参考文献

[1] 小島弥生，太田恵子，菅原健介．（2003）．賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み．性格心理学研究 11．86-98.
[2] 菅原健介．（2016）．外見の加齢変化に対する態度と精神的健康．感性工学 14(1), 3-5.

Copyright © 2021 IEICE